

93 誌上発表

中日古医籍索引の史的考察

郭 秀梅

順天堂大学医学部医史学研究室／北里大学東洋医学総合研究所医史学研究室

現在、学術書に索引をつけるのは当然のこととされ、その作成はパソコンの利用で簡単になっている。だが、かつて容易なことではなく、今日の一般化までには長い歳月を要した。そこで中日両国における古医籍索引の形成史を考察してみた。

近代以前の中国では、索引機能を通検・備検・韻編・串珠などと称した。最古は漢代の『皇覧』(222)とされ、のち唐代の『元和姓纂』(812)や宋代の『群史姓纂韵譜』、明代の『洪武正韵玉鍵』などが編纂されている。20世紀初頭に西洋式の索引が導入され、1940年代ころに盛行して『十三経索引』『二十五史人名索引』など大部な書が刊行された。ちなみに英語のindexに対応する漢語を「索引」とするのは日本に始まり、清末ころ中国に伝わったらしい。indexの中国音写訳として「引得」を使った時期もあるが、現在は索引が一般的である。一方、日本にもイロハや国字類聚・一字銘などで索引を作成する長い歴史があった。

前述した中国早期の索引は字書・韻書や類書などにとどまり、医薬学を含めた自然科学書の索引編纂はかなり遅れていた。医薬書の索引は日本が先行し、たとえば『本草和名』(約918)は『新修本草』の巻毎に収録した薬名の別名索引といえる。『本草色葉抄』(1284)は『大観本草』の薬名を日本漢音のイロハ順で配列し、別名・所出巻次・条文を列記している。いずれも中国本草書を調べる目的で作成されたが、内容の繁簡には厳密な規格性がない。しかし原文の検索には有用性がある。中国では明の趙開美『仲景全書』に収録された金・宋雲公の『傷寒類証』(1163)が早期の例だろう。これは南宋・紹興版『傷寒論』で処方付記されたらしい番号を用い、処方の証を50病門に類別して三陰三陽篇(辰・卯・寅・丑・子・亥)の処方番号で検索する書だった。

現代の索引に相当する早期の書もある。周知のように、江戸時代の本草学は『本草綱目』の影響が大きく、本草といえば『本草綱目』を指すほどであった。延宝6年(1678)に刊行された編者不明の『本草薬名備考』9巻は、『本草綱目』全52巻の薬名をイロハ順で配列し、所出巻次および和名を付している。おそらく中日両国で最初の本格的薬名索引だろう。中国では清の蔡烈先が1709～11年の3年を費やし、『本草万方針線』を編纂した。本書は『本草綱目』で薬物毎に載る附方を、疾病・症状毎に再配列した初めての方剤索引であり、中国科学技術書索引の第一作ともいわれる。両書とも『本草綱目』にもとづく索引だが、相互に関連性があるとは考えにくい。

特筆すべきは曲直瀬道三の著と伝えられる『医療衆方規矩』だが、成立や版本には複雑ないきさつがある。しかし遅くとも明和六年(1770)版以前に筆画数による索引の「一字銘」、同版以後に発音による「薬方国字類聚」と「丸散方国字類聚」の索引が付録された。ともに巻次と葉次を示し、漢字の筆画と発音による検索を目的としており、まさしく現代の索引のひな形といっても過言はない。この時代に至り、索引の発想と作成技術は成熟の段階に入ってきたといえよう。

こうした歴史をふりかえると、江戸時代には医薬書の索引が多数編纂され、アジア医薬界の頂点にあった。そして近代以降、日本の学術書には人名・書名・方名・薬名・事項などの索引が完備され、読者に利便性を提供するのみならず、周到な思いやりまでも感じられる。近年は中国の書籍も詳細な索引をつけるようになってきたが、私見では日本の影響もあるだろう。